

思い出の名バイプレーヤー 8 Yukino Bijin

ユキノビジン



1990年3月10日生 牝 栗毛
 父: サクラユタカオー
 母: ファティマ(母の父: ロイヤルスキー)
 新冠・村田牧場生産
 調教師: 阿部時男(水沢)→久保田敏夫(美浦)
 馬主: 荒井幸勝氏

岩手からやってきた 栗毛の美少女



オグリキャップ、ドクターズパート、イナリワン、オグリローマン、トロットサンダー……。昭和の末から平成の初期にかけては、地方出身馬が中央の大レースで活躍するケースが相次いだ。ユキノビジンもまた、その系譜に名前を連ねるべく1993年(平成5年)シーズンの牝馬クラシックで奮闘し、愛された存在だ。

公営・岩手競馬でデビューしたユキノビジンは、スピード感あふれる走りです連勝をマーク。南部駒賞こそ後の東北優駿勝ち馬エビスサクラの5着に敗れたものの、大いなる可能性を感じさせて美浦・久保田敏夫厩舎へと籍を移す。中央入り初戦となったクロッカスステークスでは10頭立て9番人気の低評価しか与えられなかったが、3馬身差の完封劇で芝でもそのスピードが通用することを鮮やかにアピール。飛躍的に注目度を高め、有力馬の一角としてその後のレースを戦うことになっていく。

桜花賞では、好位の内で急流を乗り切り、4コーナーで外に持ち出されるとスパート。直線入り口先頭からの粘り込みを図るベガを猛追する。わずかにクビ差およぼす2着に敗れたが、大本命馬をギリギリまで追い詰め、2番人気マックスジョリーを振り切った粘り強い末脚にいつそうユキノビジンへの期待度は高まる。

続くオークス。距離不安がささやかれるなか、ユキノビジンは懸命に戦った。持ち前のダッシュ力でゲートから飛び出すと、離れた3番手でじっくりと折り合い、4コーナーでも絶好の手応え、背後にベガを引き連れて進出を開始する。直線では坂を駆け上がりながら先頭に躍り出て「勝てるか」という一瞬を作り出した。そこからの追い比べでベガには突き放されたのだが、最後までファイティングスピリットを失うことなく駆け続けて、またもマックスジョリーには先着を許さず2着を確保。秋シーズンにはクイーンステークスで重賞初制覇を果たし、ターコイズステークスではトップハンデを克服しての勝利もあげた。世代ナンバー2牝馬としてのポジションをキープし続けたといえるだろう。

印象深いのはオークス、ユキノビジンにまたがる安田富男騎手が終始にこやかな表情でパドックを周回していた姿だ。東北からやってきた根性娘と、この馬でクラシックに挑める喜びを隠せないベテランジョッキーのコンビにファンも温かな声援を送る。確かにGIを勝てなかったユキノビジンだが、そんなふう可愛され、期待に応えようと力を振り絞ることこそ、競走馬にとっては勝利以上に幸福なことなのかもしれない。

1993年★第41回クイーンS(GIII) 堂々の1番人気でレースに臨んだユキノビジンが快勝。秋初戦を白星で飾った彼女は、この後、悲願達成を目指してエリザベス女王杯へと駒を進めるのだが……。

年月日	場	レース名	距離	着順	タイム	騎手
1992. 8.10	盛岡	3歳新馬	ダ 850	1	53.0	小野寺雅彦
8.31	盛岡	3歳	ダ1420	1	1:33.8	菅原 勲
9.14	盛岡	ビギナーズC	ダ1100	1	1:09.5	菅原 勲
10.10	水沢	南部駒賞	ダ1600	5	1:46.5	小林俊彦
1993. 2.27	中山	クロッカスS	芝1600	1	1:34.9	安田富男
4.11	阪神	桜花賞(GI)	芝1600	2	1:37.2	安田富男
5.23	東京	優駿牝馬(GI)	芝2400	2	2:27.6	安田富男
10. 3	中山	クイーンS(GIII)	芝2000	1	2:02.3	安田富男
11.14	京都	エリザベス女王杯(GI)	芝2400	10	2:26.2	岡部幸雄
12.18	中山	ターコイズS	芝1800	1	1:49.4	岡部幸雄

※レース名は当時の表記による



1993年★第53回桜花賞(GI) 直線で鋭く伸びたユキノビジン(帽色・白)だったが、ベガ(帽色・青)を抑えることはできず、クビ差2着に惜敗。



1993年★優駿牝馬(GI)(第54回オークス) 3番手追走から直線で一旦は先頭に立ったユキノビジン(帽色・黄)。しかし、またしてもベガ(帽色・橙)の後塵を拝する結果となった。